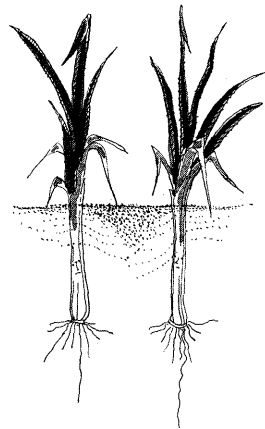


再会

津守 真

この夏、米国アリゾナで行われたOME P世界大会に参加して後、帰途、以前私共の養護学校にいた子どもの家族をサンフランシスコに訪ねた。丁度十年前に私が養護学校の子どもたちと毎日生活するようになった最初の日、その子は両親と二人の弟たちと一緒に、はじめて私共のところに来た。弟たちはすぐに活発に遊びはじめたが、この子は砂場のわきに立ったまま動かなかった。私はこの子が安心して



動けるようにと、少しずつ近づいて砂場の中に座った。そんなところからこの子は私に親しみを寄せるようになった。私も、自分の生活が新たになった最初の日のことでもあり、とくに注意深く考えて接したと思う。その日のことについては、『子どもの世界をどうみるか』(日本放送出版協会 P. 123-126、P. 145-150)に記した。そんなことから始まって、この子は私に対していろいろの課題を投げかけてき

た。ある時期には、食物を半分食べて残りの半分を床に投げ捨てることがつづいた。私はどうしたらよいか悩んだが、あるとき、これはこの子が何かを私に訴えているのだろうと気付いた。大好きなお菓子も半分食べて、あと半分をだめにしてしまうというのは、自分が始めたことを最後までやり遂げられないでいる体験を行動によって表現しているのではないかと考えた。そう考えたとき、何事であれ、この子が自分で納得して終結させるまで、この子の活動を守ってあげようと思い、実際そのように努めた。そのときから、食物を投げ捨てる行動は劇的に減少した。それまで私は、幼児が自分から始めたことを大切にすることが保育の実践の出発であることを知っていたが、この子どもとの交わりから、子どもが納得して終わることは、同様に大切であることを学んだ。

この子は約三年間、私共の養護学校の幼稚部で過ごした後、父親の仕事の都合で米国に移住した。母

親からは手作りのチョコレートを送って頂いたり、クリスマスカードを送って下さって、この子が私の名前をときどき口にしてることを知らされていた。米国では、この子は養護学校小学部にいった。

そこで行動療法の理論によって、この子が手を髪にあてる癖をなおすプログラムが組まれたとき、両親は学校にゆき、そのような癖を親は気にしていないこと、子どもが生活を楽しめるようにしたいと願っていることを先生に伝え、先生も親の希望をいれてすぐにカリキュラムを組みかえたことを聞いた。私はこの両親の見識に感心した。数年前には、その学校の先生が、日本に観光旅行に来られたとき、わざわざ一日を割いて、私共の養護学校を訪ねて下さった。穏やかで控え目な米国の婦人で、これらのことをこまかく話された。私もこの子の生活を具体的に語り、周囲が騒がしいときにはトイレの隅に入って黒い絵の具を紙一面に塗ってはトイレに流していたこと、先生達の机のひき出しから写真を取り出して

眺めるのが好きだったことなどを話すと、目の前に見えるようだと言って、楽しく別れた。

今回は丁度七年ぶりに、私自身がこの子を訪ねることになった。幼児のときに、この子と悩みつつも楽しんで過ごした、あのときは大切な記憶として抱きながら、年月を経たいまは別のつき合いなのだから、新しい出会いをしようと心に決めて出かけた。

熱い砂漠のアリゾナの岩山は、飛行機で上空から見ると、フェニックスからサンフランシスコの町のすぐ手前までつづいているように思えたが、空港をおりると別世界の涼しさであった。ホテルに着いて翌朝、父親が車で迎えに来られた。子どもは私に会うというので今朝からいつもと様子が違うとのことであった。車の中でこの子は私の脇でうずくまり、次第に足を私の肩にのせて、ときどきちらりと私を見た。ようやく足の先で私に触れることによって挨

拶をしているようで、正面から顔を合わせることもなご恥ずかしくてできないというような具合だった。

それだけにこの子の中にも再会の心の高揚を感じさせられた。三十分程車で郊外に出たところにあるその家は、米国西海岸に特有の平家建ての家で、広い庭に向かってテラスがあった。中学一年生になったこの子は、まだ私よりも背丈は低いが、幼児のときとは違った体つきになっていた。以前よりもずっと社交的に明るくなった父親が、「つもりジュース」を御馳走しましょうと、バック容器のジュースを台所から居間にもってこられた。私は何のことかといぶかっている、ボール・ニューマンの顔のプリントされたその容器のジュースを、子どもはこう呼んでいるとのことだった。私は、あのときのことを、この子がそんな風に記憶していることを知って、全身が顫えるような気がした。そして、不安定な時期を支えた人に対する記憶は、いつまでも子どもものの心の内に留まっていることを知らされた。毎日の生活

の中で、行動を子ども心の表現として見て保育するのには、ある種の冒険を必要とするのだが、あの時そうしてよかったと、あらためて思った。

庭で、母親の手作りのメキシコ風の昼食パーティの間も、この子は飛びはねたり、室内の片隅にいたりしていたが、私共の方をちらちらと見ていることに私は気付いていた。母親が台所に立つとついでゆき、ボールの中のヨーグルトをスプーンでかきまぜて冷蔵庫にいれるのも、幼児のときからの続きのように思えた。そして数時間の滞在が終わる頃には、私の膝に座り、私を見上げて、幼児のときと同じ笑顔を見せた。空港に出発する時間が近づき、私共はそれで別れねばならなかった。

子どものある時期の日々を、一生懸命に支えつつ子どもと共に生活した記憶は私共の中にいつまでも生きているし、子ども自身にとってもそれは忘れ難

いだらうと思う。しかしそのことを互いに確認する機会は稀である。今回の再会はその意味で私にとり貴重なものだった。再会は、互いがその後の人生の歩みを一歩進めた時点でのことである。過去の記憶には懐かしさが伴うが、それだけではない。あのとき、互いに生きる力を得た。その同じ力をもってこれからのそれぞれの道を歩むのが、再会の更には後である。

父親はあと十年はここで腰を据えて専門の仕事をするつもりだと顔を輝やかせておられた。弟たちの机の上には、トロフィーが幾つも飾られてあった。学校では、優賞のためでなく、競技に参加したしるしとしてトロフィーをくれるのだそうである。そう話された母親の顔は明るくて、この地の学校に支えられて家族の皆が前進しておられるのを見て、私もまた励まされて帰途についた。

(愛育養護学校)